

社会（科）学と批判
——リュック・ボルタンスキーの議論を手がかりに——
片岡大佑（東京大学）

今年7月、世界社会学会横浜大会のために来日したばかりの原著者リュック・ボルタンスキーは、現代フランスを代表する社会学者として知られている。日本においてもすでに、1991年の『正当化の理論』（ローラン・テヴノーとの共著）、1999年の『資本主義の新たな精神』（イヴ・シャペロとの共著）の二冊の代表作には翻訳があり、とりわけ昨年秋に刊行されたばかりの后者は、緻密にして説得的な分析と専門性に閉じこもることのない一般的な視野を兼ね備えた希有な著作として高い評価を受け、現代資本主義を特徴づける諸問題——「新自由主義」の展開、社会的排除と包摂をめぐる理論と実践——をめぐる考察を活気づけるものとして、大いに注目されている。

ところで、ボルタンスキーの社会学者としての軌跡は、穏やかで波乱のない発展として捉えることのできない屈折を示してきた。

1970年代にはピエール・ブルデューのもとで共同研究に従事していた彼は、80年代になって独自のグループを立ち上げるとともに、師の「批判社会学」に対抗して「批判の社会学」（または「批判のプラグマティック社会学」）を掲げた。批判社会学は、支配の構造の析出に力を注ぐあまりに個々の行為者を無力な存在としてしまい、そこでは「幻想のうちに沈み込んだ一般の人々」と「科学の光に照らされた社会学者」の間の非対称性が深められていく……。ブルデュー社会学のうちにこのような問題を認めたボルタンスキーらは、日常を生きる人々の批判的営為を意義あるものとして把握するための新たな方法論の構築を目指したのである。その最大の成果として生まれたのが91年の『正当化の理論』である。しかし99年の『資本主義の新たな精神』は、前著の一種の応用編としての側面を持ちつつも、理論的には、自らの批判の社会学とかつての師の批判社会学の間の中庸を探る試みとして企てられたものだ。この理論的な（再）転換は、90年代半ば以降に顕著になった現代資本主義の活力を前にして、ボルタンスキーが個々人の日常的な営為を越えた構造的問題を問い直す必要性を自覚したことに由来している。

もちろん、しばしば新自由主義の名に結びつけて説明されるこの新たな活力は、90年代になって突然生じたものではない。しかし80年代において左派政権下に進行した重大な変化は、当時のボルタンスキーによってはそれと意識されることがなかったのだという。それに対して、「私たちが『新たな精神』執筆に取りかかった1995年には、状況は変化し、大きな不安をかき立てるものとなっていました。1970年代が終わってからの時期、西洋において生じた顕著な現象とは、一種の社会民主主義的な社会主義の到来ではなく、資本主義の支配力の増大であったということ。この事実を認めないでいることは、もはやできなくなっていたのです」——このように彼は回想している。

とはいえ、二つの社会学の対話は、1999年の段階では、なお批判の社会学の側

《第3分科会》
イデオロギーと知の構造

の視点に傾きがちのものであった。ブルデュー社会学とのこの一種の和解をさらに深めつつ、二つの社会学の対話を通して新たなパースペクティブを開こうとする試みが、2009年の『批判について——解放の社会学概論』である。今回の報告においては、『正当化の理論』から『批判について』に至るまでのボルタンスキーの軌跡を簡単に辿った上で、80年代以降のフランスにおける新自由主義の展開と社会（科）学の関係をより一般的に概観するとともに、学問による社会批判のあり方を考えてみたい。